

縄文時代前期のムラ・御望（ごも）遺跡

平成23年度 やさしい考古学講座

平成24年1月15日 於：ハートフルスクエアG 2階 中研修室

岐阜市教育委員会社会教育課 内堀信雄

1 立地（図1・2）

位置：濃飛平野の北端と美濃山地南端の接する部分

立地：御望遺跡北に山地（御望山など）。遺跡は「黒野台地」上に立地。「黒野台地」は2～1.8万年前に「古根尾川」により形成された扇状地。表面は黒色土壌（黒ボク）で覆われる。

※御望遺跡の縄文前期の生活面はこの黒ボク土層中⇨縄文前期に黒ボク形成中

2 発掘の経過（図2）

道路工事に伴う発掘調査で大きく2つの地区（A・C区、B区）から遺構・遺物が見つかった。本日は、A区の縄文前期の遺構・遺物を紹介する。

調査原因：道路建設（市道西郷1号線）

調査期間：1次調査（A区）平成3年11月5日～平成4年3月23日

2次調査（B区）平成4年10月19日～11月16日

3次調査（A・C区）平成5年5月6日～6月29日

調査主体：岐阜市教育委員会

報告書：岐阜市教育委員会『御望遺跡発掘調査概要報告書』平成4年3月発行

岐阜市教育委員会『御望遺跡—西郷1号線建設に係る緊急発掘調査の記録—』

平成7年3月発行

3 遺跡の概要

【A・C区】

◎縄文時代前期後葉～末葉…竪穴住居8軒、土坑24基、集石遺構18基等確認。

・縄文時代中期後葉…竪穴住居2軒。土坑3基。

・弥生時代後期…竪穴住居1軒。

・古墳時代後期（6世紀後半～7世紀）…竪穴住居2軒。

【B区】

・奈良時代（8世紀）…竪穴住居21軒。土坑2基。

・戦国時代（16世紀）…方形竪穴状遺構1基。溝3条。掘立柱建物1軒。

・江戸時代（17世紀）…溝3条。

4 縄文前期の遺構～家・墓・調理施設？（表1）

① 家（竪穴住居）（図3・4、表2）

特徴

i 平面が円形orいびつな円形。

ii 壁面が緩やかな傾斜。床と壁の境が不明瞭。

iii 柱穴は壁に沿って回る傾向か？

iv 貼床（はりゆか）見られない。

v 石皿（いしざら）が据え置かれた住居あり（4軒）。

vi いずれも地床炉（じしょうろ）（2軒）。

※i～iiiから明確な壁をもたない変わった家と見られる。円錐形の屋根か？

② 集石遺構（土坑の埋土中に被熱礫を大量に含むもの）（図5・6）

18基確認。2ヵ所に分布。ひとつは、北部と南部の竪穴住居分布域の間の住居がほとんど存在しない空間。もうひとつは、南部竪穴式住居分布域内。

土坑の埋土は炭を大量に含む黒色土が一般的。集石遺構については、「オセアニア地域に見られる石蒸焼き調理に対比されるような食物加工施設として認識されている」（野嶋2007）。

③ 墓穴（遺物が埋められた土坑）（図7～9、表3）

土坑（穴）を24基確認。土坑は集石遺構と重複する2ヶ所に分布する。24基の内、11基には土器や石皿などの遺物が意図的に埋められていた。

11基は出土遺物の内容から5つに分類。11基の内2基（SK13・16）からは骨片が見つかっており、墓穴であった可能性が高い。このことから、他の遺物を伴う土坑についても墓穴の可能性はある。

A類…土器と石皿or台石を埋めるもの（6基・SK12・13他）（図9）

B類…石皿のみを埋めるもの（1基）

C類…土器と石匙を埋めるもの（1基・SK04）（図7）

D類…土器と玦状耳飾を埋めるもの（1基・SK08）（図8）

E類…土器のみを埋めるもの（2基）

5 遺物（土器・石器・石製品）

① 土器（図10）

(1) 土器分析の方法（表4）

ア 過去の研究成果からこの時期の土器を14群に分類。大きくは、西日本系、東日本系、在地系と理解。

↓

イ 竪穴住居に埋まっていた土器がどの群に属するか検討し、A～Cの3群に分離。

A群（西日本系〔2・6・6群〕、東日本系〔9群の一部〕）

B群（在地系？〔3・10・11群〕、9群〔一部〕）

C群（西日本系〔4・5群〕、関東系〔8群〕）

↓

ウ この3群を時期差（A群→B群→C群）と推定し、I～IIIの3時期に区分した。

(2) 土器変遷 (図 10)

- I 期 西日本系の土器 (北白川下層 II b 式 (新) ~ II c 式類似) が主体。特定器種 (列穴浅鉢) が東日本系土器 (諸磯式類似) からなる。
- II 期 地域色豊かな土器群で占められる時期。この時期の土器様相の詳細は未検討。
- III 期 再び西日本系 (北白川下層 III 式 ~ 大歳山式類似) 主体で、東日本系土器 (十三菩提式・晴ヶ峰式類似) がともなう。

② 石器・石製品 (図 11・12)

(1) 種類

- 石鏃 (231 点)、石錐 (71 点)、異形石器 (3 点)、楔形石器 (13 点)、石匙 (39 点)、削器 (72 点)、横刃形石器、块状耳飾 (2 点)、特殊な石製品、打製石斧 (1 点)、RF (加工痕のある剥片)、UF (使用痕のある剥片)、石核 (31 点)、剥片 (2, 915 点)、石錘 (442 点)、磨石 (205 点)、砥石、石皿、台石、磨製石斧 (17 点)、礫器
- (2) 石材の大部分は在地産を使用するが、石鏃、石錐、石匙は下呂石とサヌカイト製のものが一定量含まれる (表 4)。
- (3) III 期の堅穴住居 SB02 からは石錘がまとまって出土 (47 点)。
- (4) 块状耳飾 2 点出土。1 点は土坑 (SK08) 底から出土し、墓の副葬品の可能性大 (図 8・12)。

6 ムラの姿 (図 13)

御望遺跡前期後葉~末葉の遺構群から環状の構造を持った集落の全体像が伺える。

- I 期 中央部に径 30m の土坑と集石遺構からなる分布域が存在。分布域の南北に 20~30m 程の幅でドーナツ状 (推定) に堅穴住居が分布する。堅穴住居には小形のものが見られる。土坑の多くは墓穴だった可能性がある。
- II 期 I 期同様の土坑と集石遺構からなる中央部及びその周囲の堅穴住居分布域が見られる。集落全体が北側へ 12m 程移動しているらしい。
- III 期 堅穴住居は 1 軒のみ確認。土坑数も激減。環状の構造は見出せない。この時期を最後に縄文中期後葉まで生活の痕跡は見られない。

7 おわりに

(1) 御望遺跡とは…

- ・岐阜市内で数少ない縄文時代を代表する遺跡
- ・縄文時代前期後葉~末葉の集落構造や変遷がある程度判明した。
- ・石錘の多さは注目される。「木曾川流域の坂祝町芦戸遺跡や長良川流域の岐阜市御望遺跡においても、多数の石錘が出土している。芦戸遺跡では 315 点、御望遺跡では 442 点の石錘が出土しており、ともに打欠石錘が主体であるが、切目石錘も含み、重量分布は両遺跡ともに 10~20g のものが最多である。当該時期には河川での漁撈活動に適合するものとして、打欠石錘を主体とした小型の漁網錘が普及したようである。」(田井中 2007)。

(2) 土坑 SK04 出土土器を紹介した小杉康氏の研究 (内堀—8)

《参考文献》

- 野嶋洋子 2007 「集石の民俗誌—焼石調理の特徴と先史学的意義—」『縄文時代の考古学 5』同成社
- 田井中洋介 2007 「石錘による網漁」上記文献
- 小杉康 2003 『縄文のマツリと暮らし [先史日本を復元する 3]』岩波書店



南から御望周辺を望む。後方の山は御望山。

御望の風土

「御望は西風の強い所である。秋から翌年五月にかけての「伊吹おろし」は、御望山と舟木山ふなきやまで狭められた風ですごい。果樹園でも枝が西へ伸びにくく、枝先が東向きになってしまう。日当りが良く、むし暑い。だが、住めば都。人間は、強風や日差しを防ぐために屋敷の西に樹木を植え、自然と上手に付き合ってきた。中小河川・用水路は多くあった。夏になると一・二回の水不足に悩み、又台風時や、長雨による水害に見舞われたが、簡単な漁具でたくさん魚がとれた。今から二十年ほど前に行われた土地改良後、環境整備が進み住み良くなったが、魚も蚤もいなくなった。」

(御望在住、西垣義郎さんのお話)

県内のできごと ()内の数字は本文のページ		日本・世界のできごと	朝鮮	中国		
旧石器時代	30000前	県内では最も古い石器が出土する(寺田遺跡)(4) ナイフ形石器の使用(寺屋敷遺跡他)(6) 細石器の使用(宮ノ前遺跡他)(10)	○アルタミラ(スペイン)・ラスコー(フランス)の洞穴絵画			
	草創期	前11000	尖頭器の使用 弓矢・土器の使用が始まる(宮ノ前遺跡他)(16) 洞窟が利用される(九合洞窟他)(10)	○氷河期が終わる ◇日本列島が成立		
		早期	前4000	温暖化がすすみ遺跡の数が増加 竪穴住居に住み始める(沢遺跡他)(28)	○メソポタミア・エジプトで農耕・牧畜が始まる	
	縄文前期		前3000	大規模な集落が形成されるようになる(糠塚遺跡他)(28) 塊状耳飾の使用(24) 御望遺跡縄文前期のムラ	○メソポタミア文明 ○エジプト文明	
		中期	前2000	集落が環状を呈する遺跡が見られる(塚原遺跡他)(28) 埋甕・土偶・石棒の流行(24) 飛驒に周辺地域の土器の流入(堂之上遺跡他)(26)	○インダス文明 ○黄河文明	
	後期		前1000	石棒の製作(塩屋金清神社遺跡)(24) 土偶の出土が多くなる(西田遺跡他)(24) 遺跡数の減少		
		弥生前期	前300	御物石器・石冠などが多くつくられる(24)	○シャカ(前563ころ～前483ころ) ○孔子(前551ころ～前479) ○アテネで古代民主政さかえる	
	中期		前221	遠賀川系の土器が県内各地で見られる(はいづめ遺跡他)(36)	前334 アレクサンドロス大王の東方遠征(～前324) 前221 秦の始皇帝が中国を統一 前141 武帝即位(～前87) 前97 司馬遷、『史記』完成 前27 ローマ、帝政となる 前4 イエスが生まれる	
		後期	前100	銅鐸のまつりが始まる(十六銅鐸)(40)	◇倭人百余りの小国をつくる 57 倭の奴の国王が後漢に使いを送る	
	古墳前期		300	方形周溝墓がさかんにつくられる(古村遺跡他)(38) パレススタイル土器がつけられる(荒尾南遺跡他)(36)	◇倭国内乱 220 漢ほろび魏・呉・蜀に分かれる 239 卑弥呼が魏に使いを送る	
中期		400	前方後方墳・前方後円墳の築造が始まる(象鼻山1号墳他)(42)	376 ゲルマン民族、ローマ領内へ移動開始 392 キリスト教、ローマの国教となる 413 倭王、中国に使いを送る		
	後期	500	昼飯大塚古墳の築造(44)	478 倭王武、南朝に使いを送る		
古墳中期		400	琴塚古墳の築造(44)			
	後期	500	横穴式石室の普及(二又1号墳他)(48) 群集墳の形成(船来山古墳群他)(44)			
600		方墳・横穴墓の築造(次郎兵衛塚1号墳他)(47)				

表1 御望遺跡(縄文前期)の時代

(岐阜県編『わかりやすい岐阜県史』平成14年から引用、一部改変)

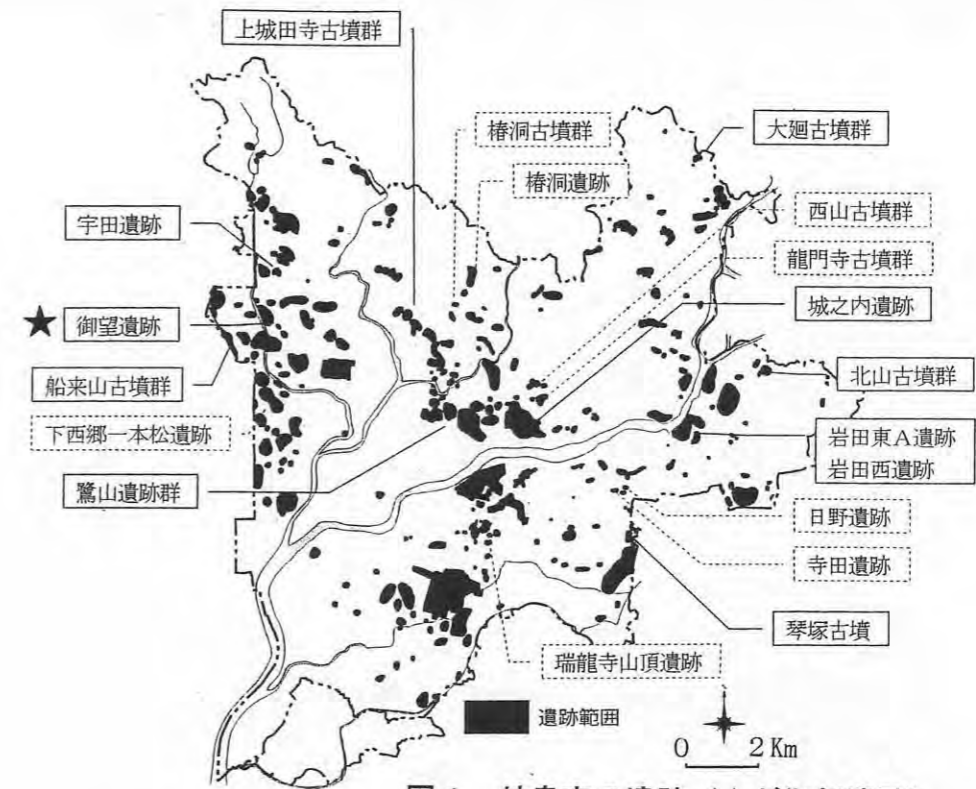


図1 岐阜市の遺跡(★が御望遺跡)

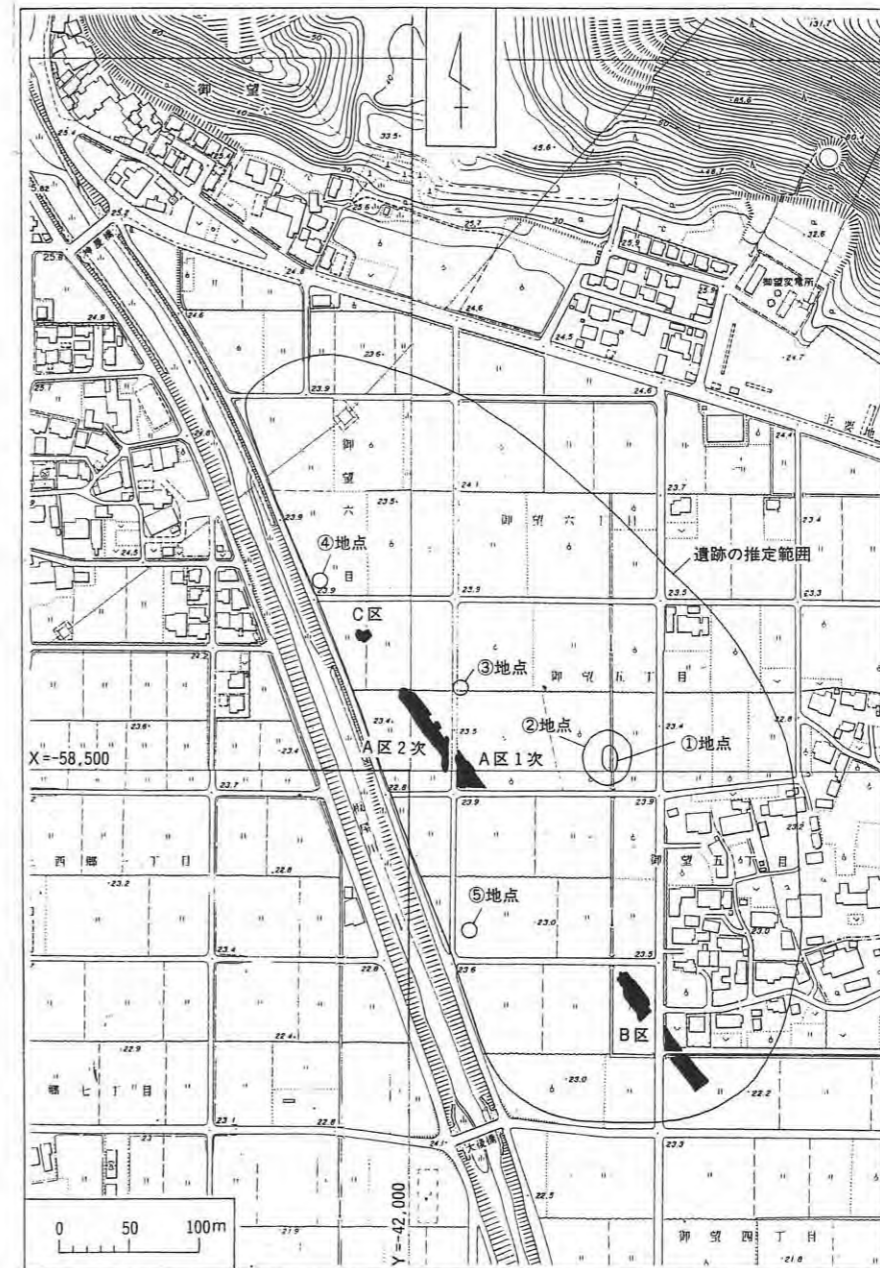


図2 御望遺跡調査区(A区が縄文のムラ)

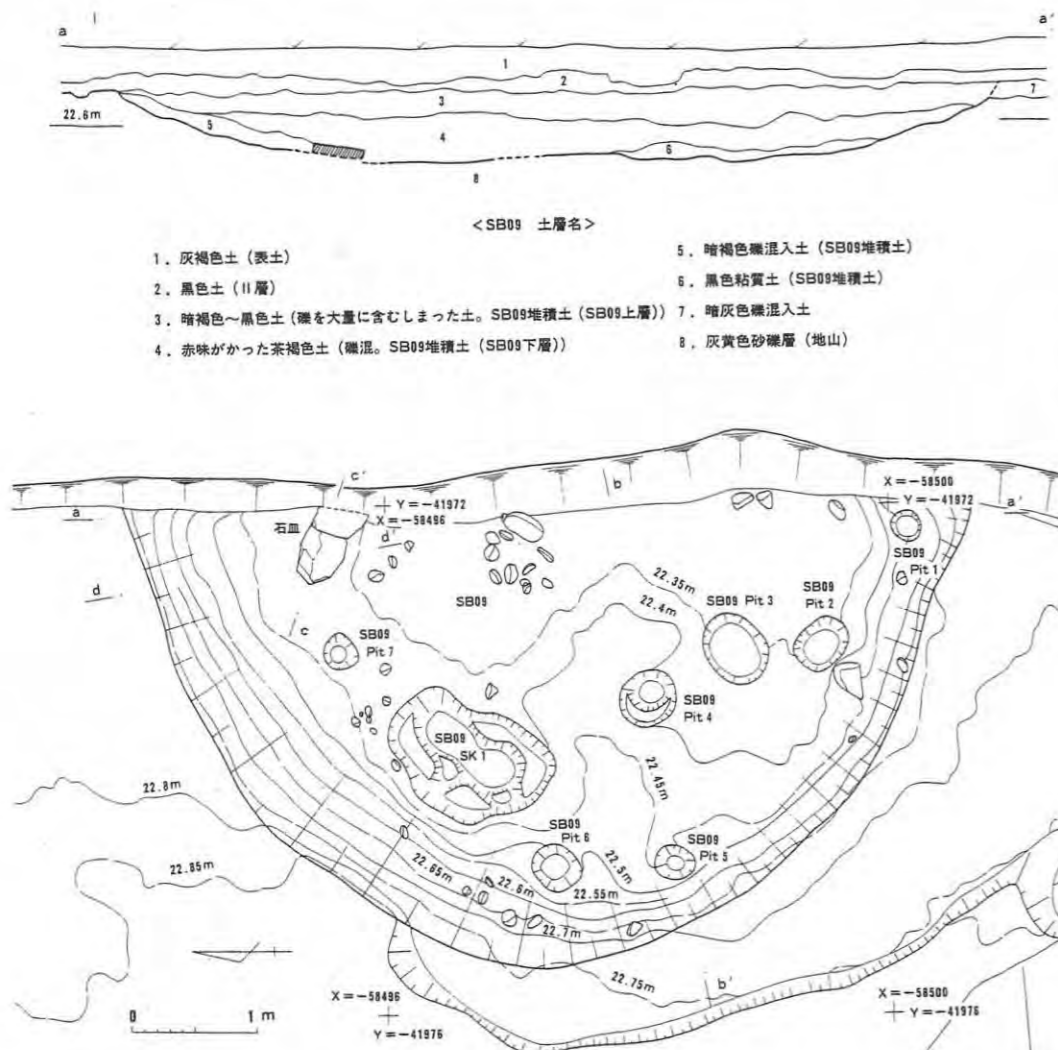


図3 竪穴住居SB09 (II期) 実測図

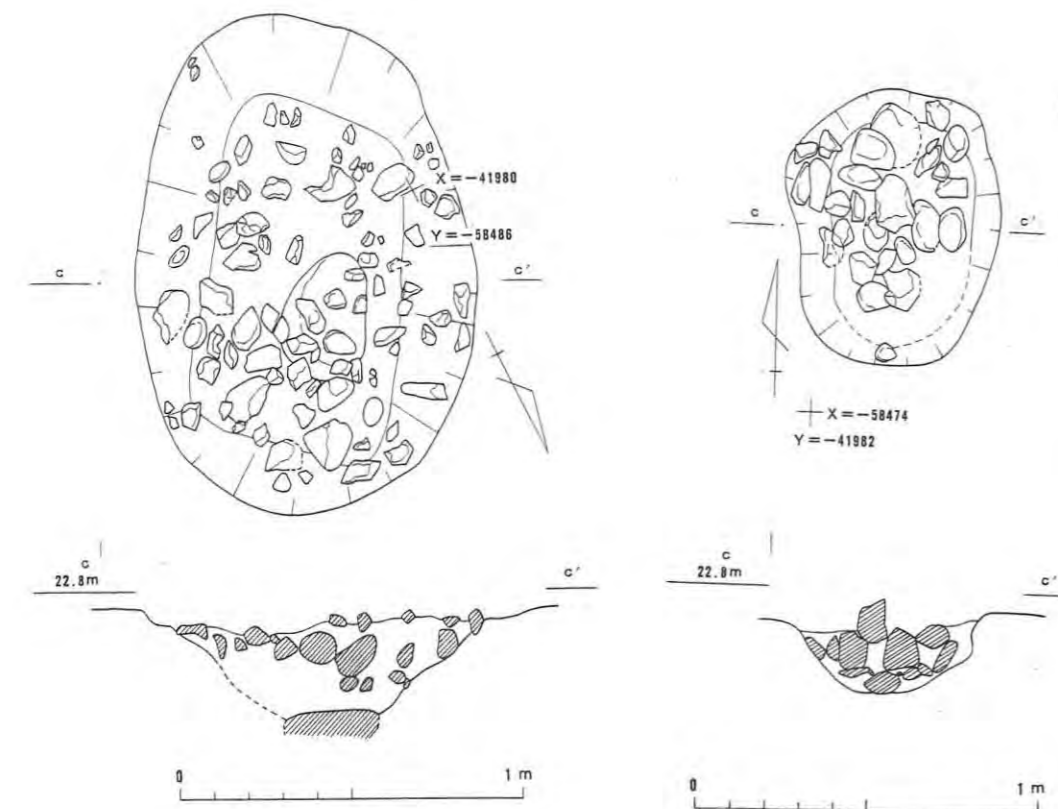


図5 集石遺構S17実測図

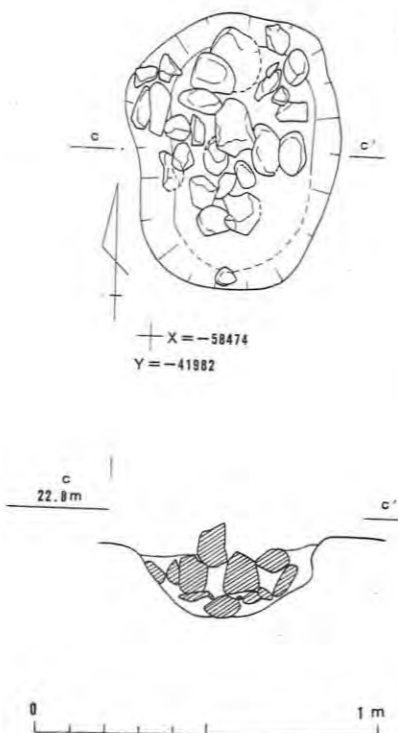


図6 集石遺構S15実測図

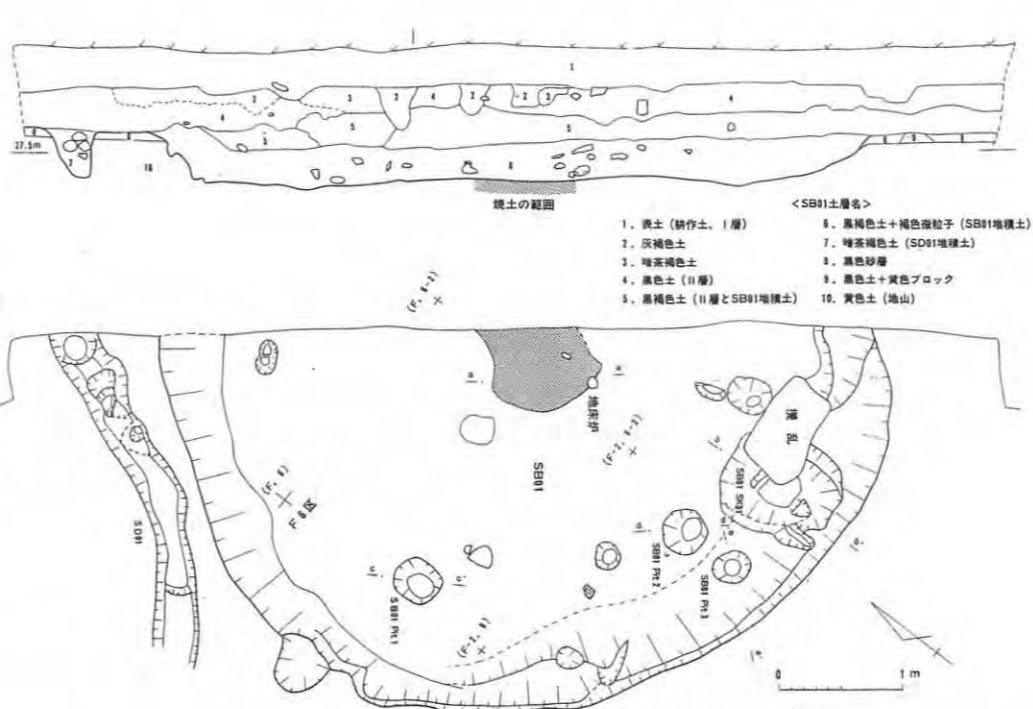


図4 竪穴住居SB01 (I期) 実測図

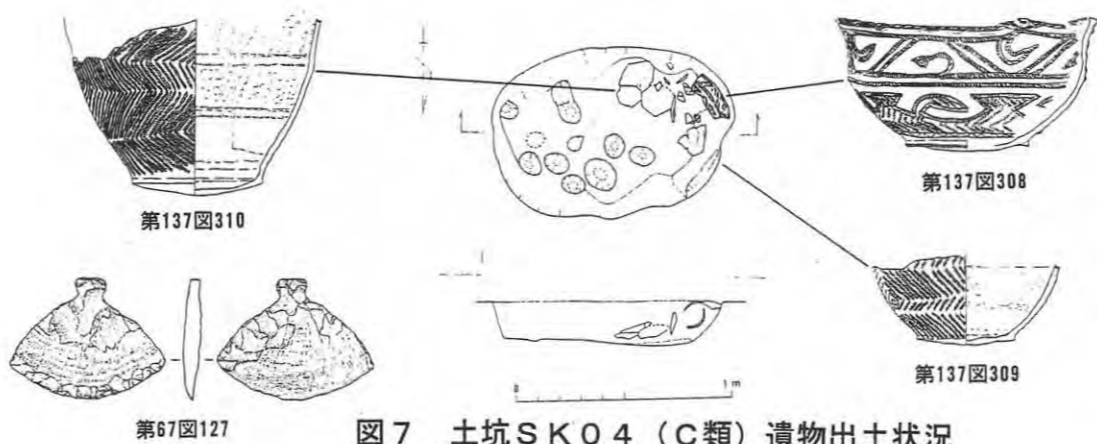


図7 土坑SK04 (C類) 遺物出土状況

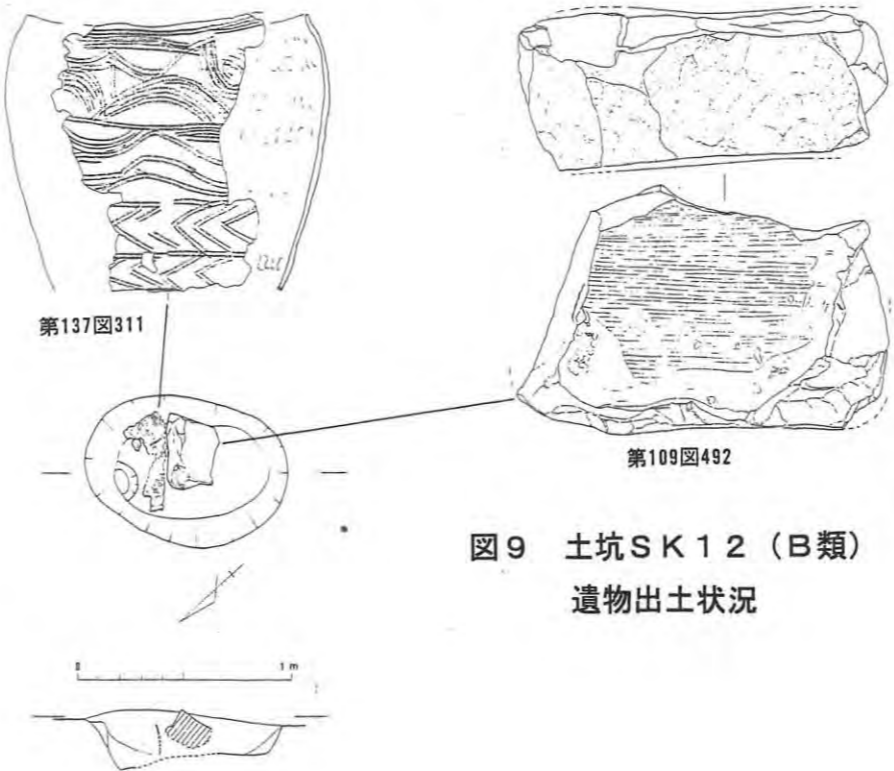


図9 土坑SK12 (B類) 遺物出土状況

番号	平面形	規模	炉跡	備考
SB01	円形	直径5.8m。確認面から床面までの深さ30~40cm。	地床炉(1)	
SB02	不整形円形	東西3.2m。確認面から床面までの深さ15cm前。	—	床面北東隅に石皿設置。
SB03	円形	直径2.4m。確認面から床面までの深さ10cm。	—	床面中央部に焼石と磨石出土。
SB04b	不整形円形	径4.5m以上。確認面から床面までの深さ30cm。	—	
SB05	円形	直径3m。確認面から床面までの深さ15cm。	—	床面中央部面直上でまとまった土器片出土。
SB08b	円形	長径6m、短径4.9m。確認面から床面までの深さ40cm。	—	北西部の傾斜した壁面上に石皿設置。
SB09	不整形円形	最大径6.5m。確認面から床面までの深さ60cm。	—	中央部付近の床面より5cm浮いた状態で一部火を受けた石が集中。
SB10	円形	長径5.6m、短径4.5m。確認面から床面までの深さ20cm。	地床炉(1)	炉直上に被熱した扁平円礫が置かれていた。

表2 縄文前期竪穴住居一覧

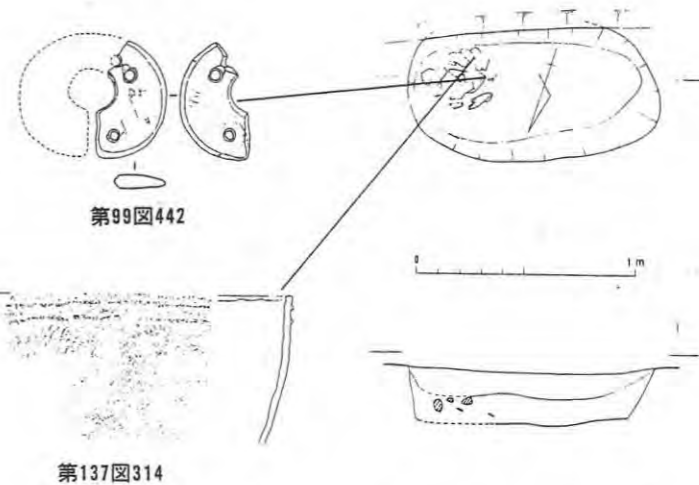


図8 土坑SK08 (D類) 遺物出土状況

遺構名	土壌分類	破損土器	石皿			被熱礫	備考
			被熱	破損	破損後期		
SK04	C	○	—	—	—	×?	1点の土器の中から石匙出土
" 05	A	○	×	○	○	×	
" 08	D	○	—	—	—	○	
" 09	E	○	—	—	—	○	
" 10	A	○	○	○	×	○	
" 12	A	○	×	○	×	×	
" 13	A	○	○	○	○	×	石皿の裏被熱
" 15	A	○	○	○	×	×	
" 16	B	—	1/2	×	○	×	○多数
" 29	E	○	—	—	—	○多数	
" 36	A	○	×	○	×	×	台石

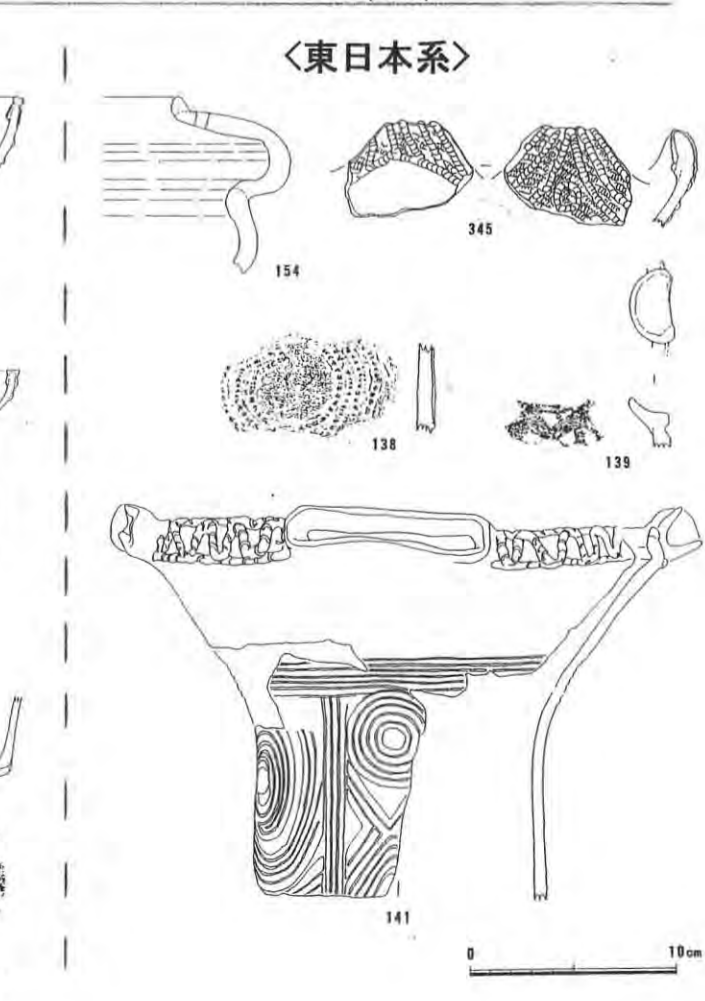
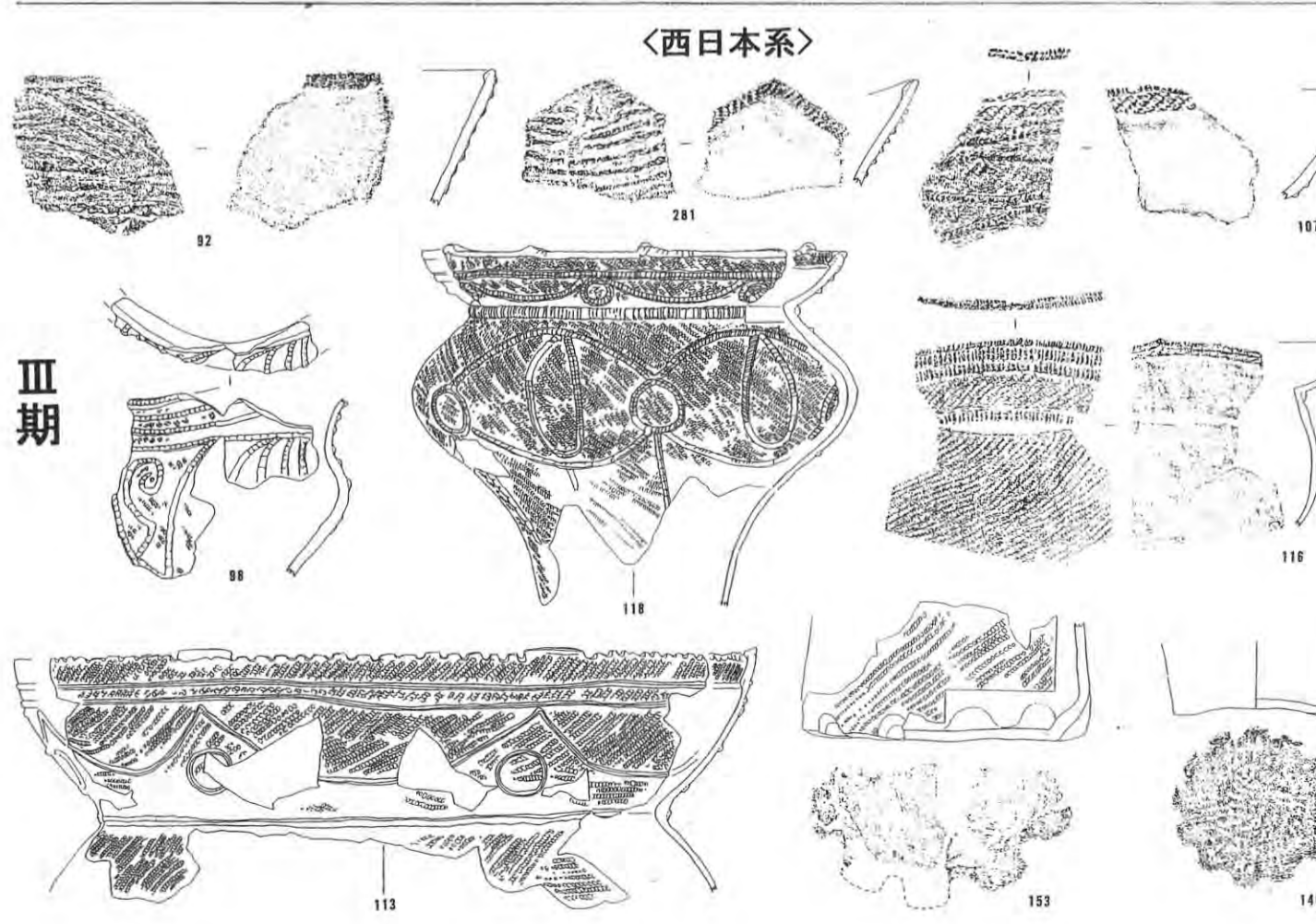
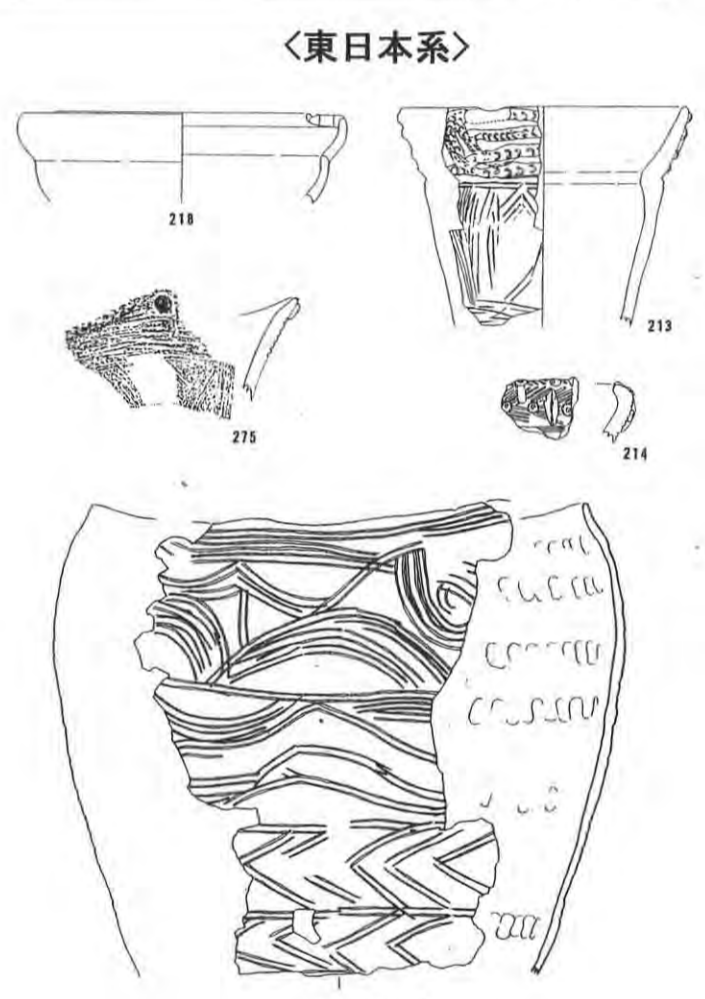
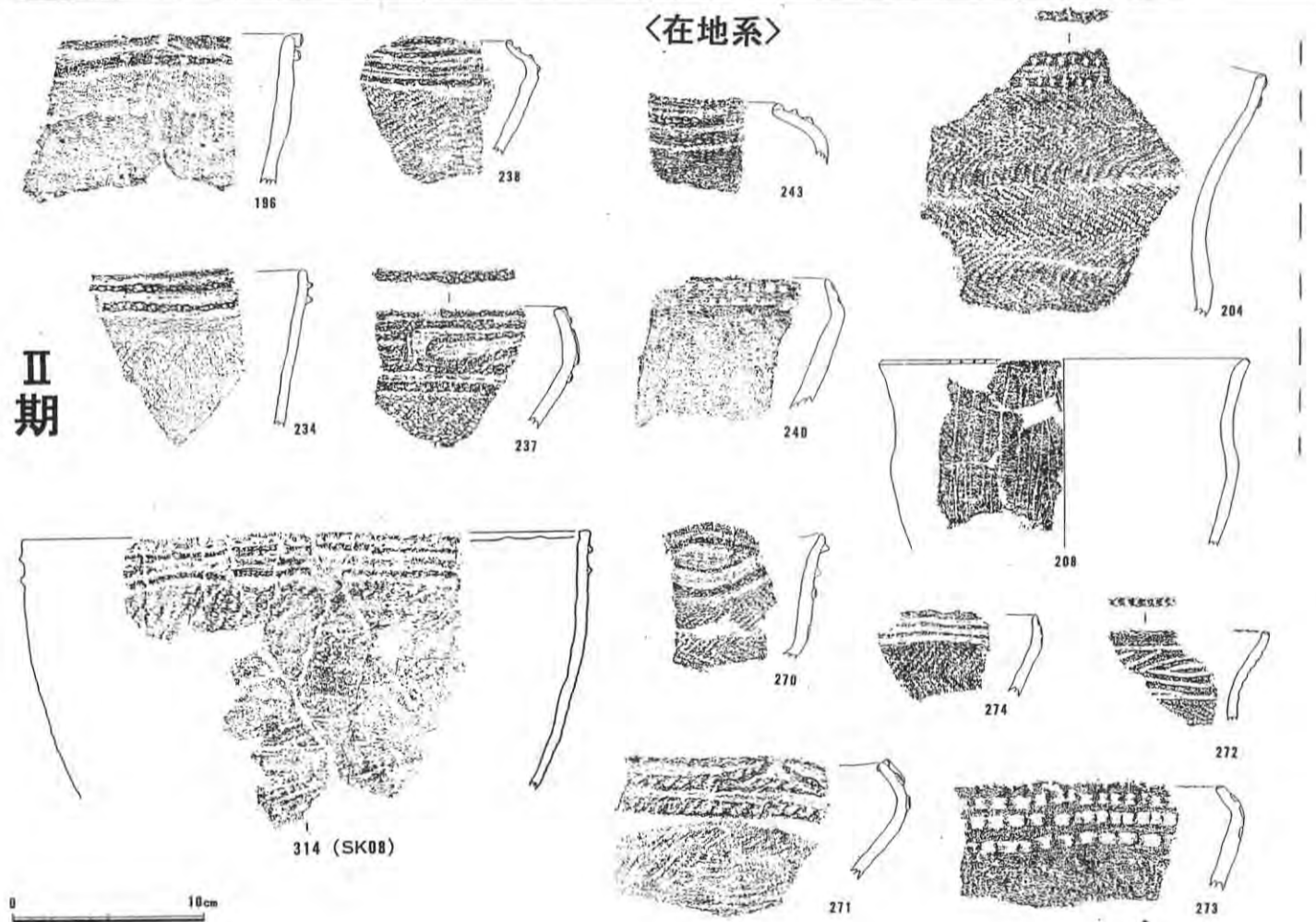
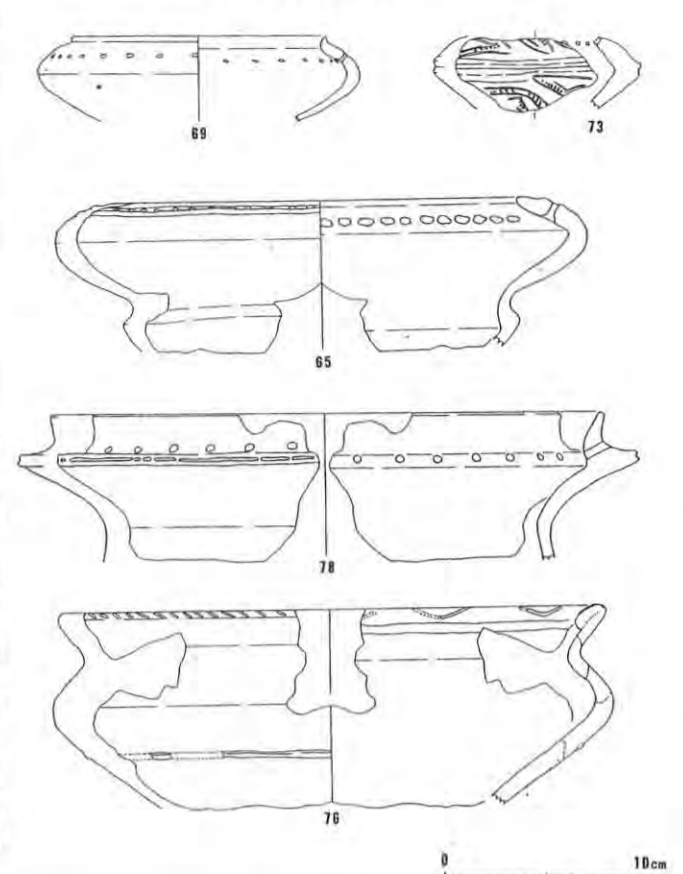
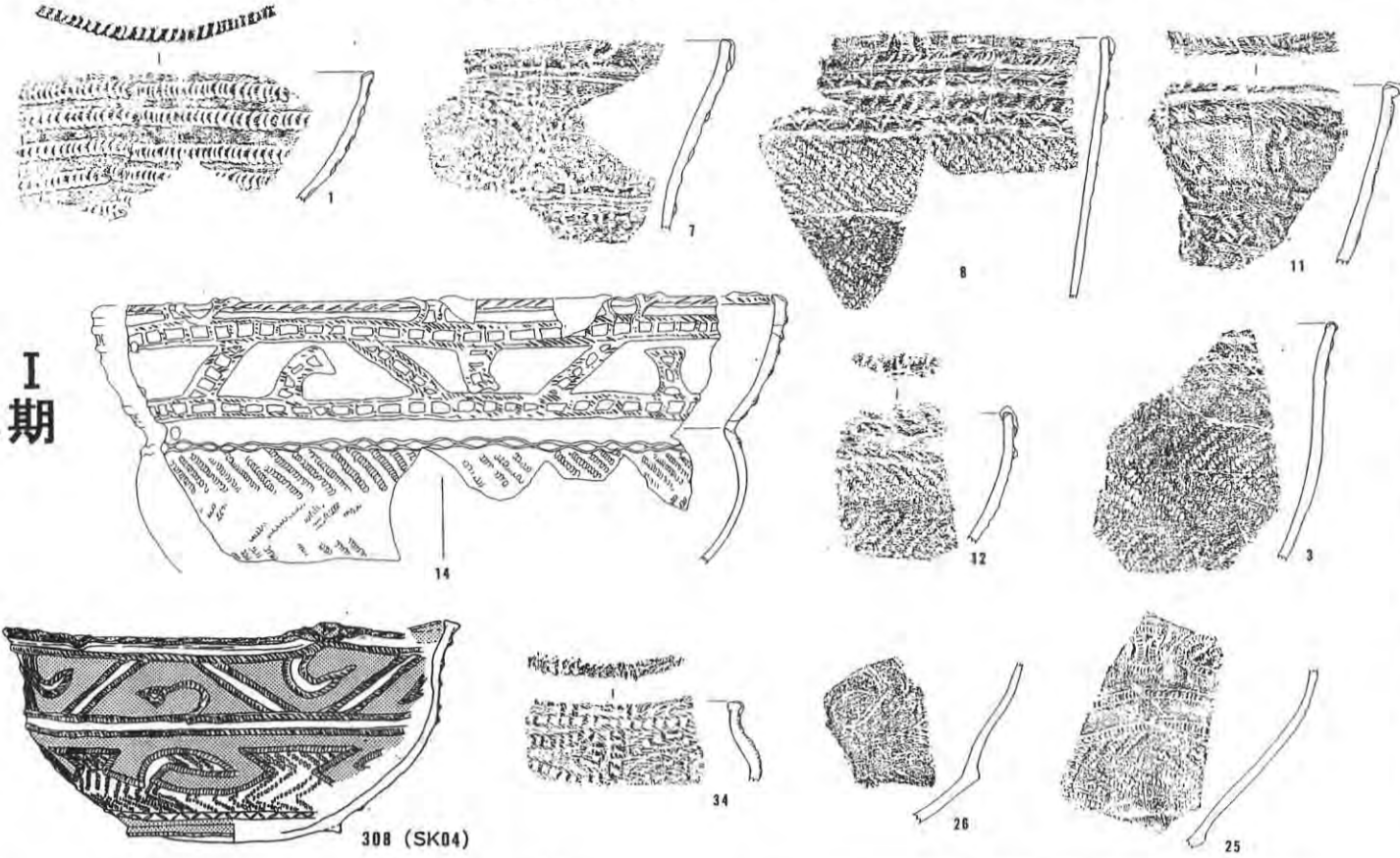
※被熱礫の「?」は発掘時に注意が足りなかったため、少数の被熱礫が入っていた場合、見のがした可能性があることを意味する。

表3 縄文前期の遺物を伴う土坑一覧

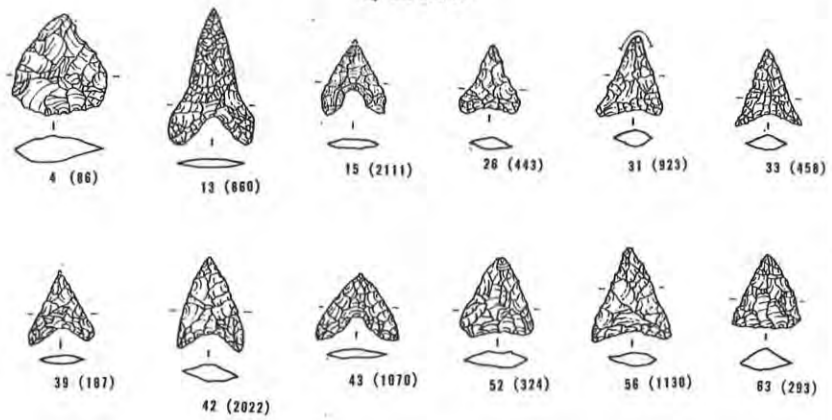
〈西日本系〉 図10 御望遺跡出土土器

〈東日本系〉

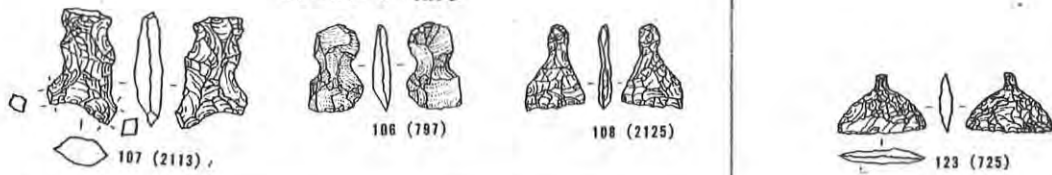
内堀—5



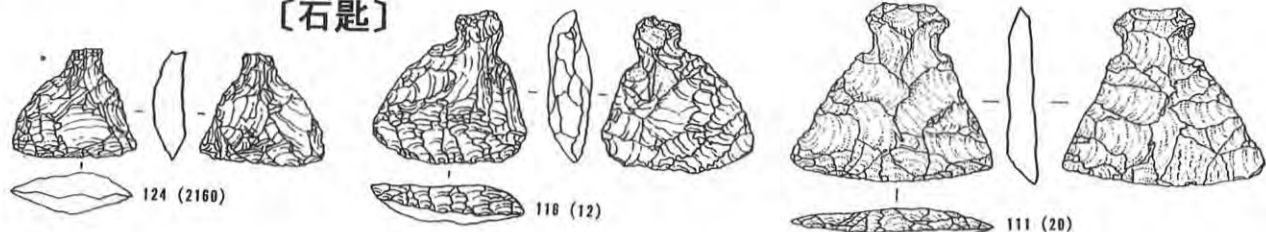
〔石鏃〕



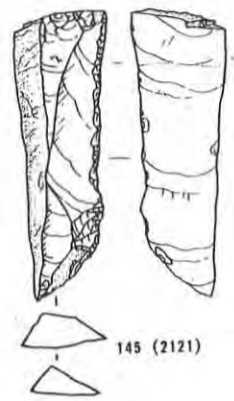
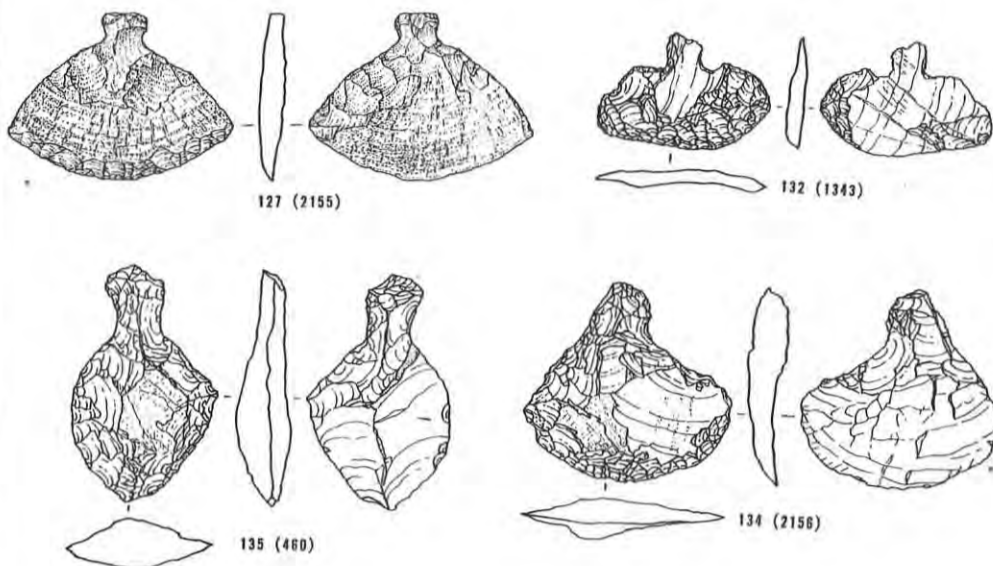
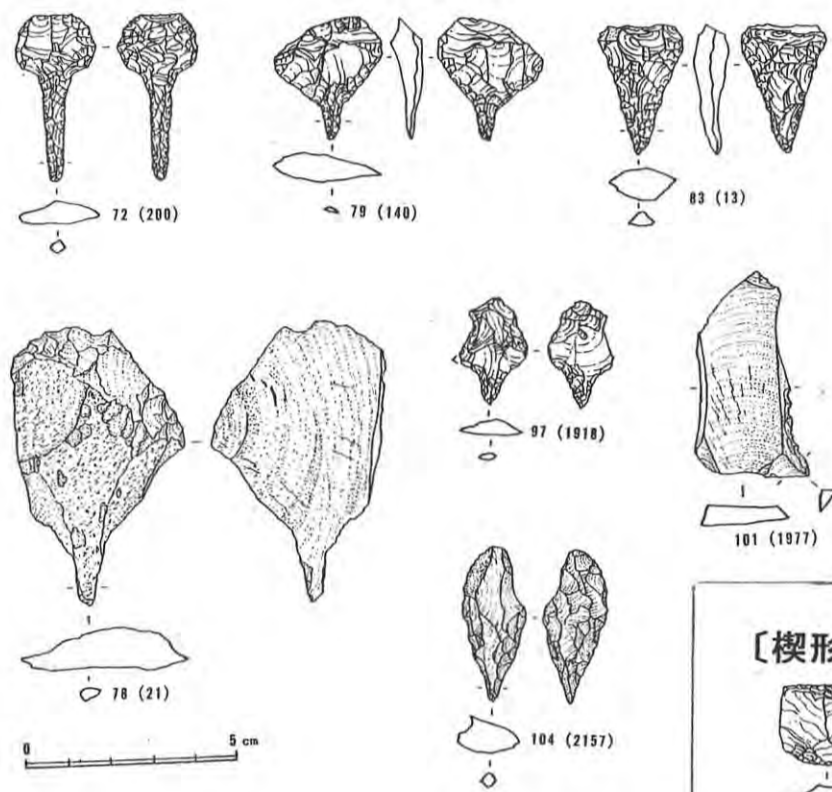
〔異形石器〕



〔石匙〕



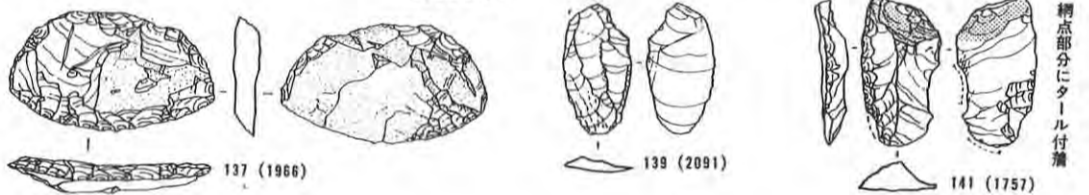
〔石錐〕



〔楔形石器〕



〔削器〕



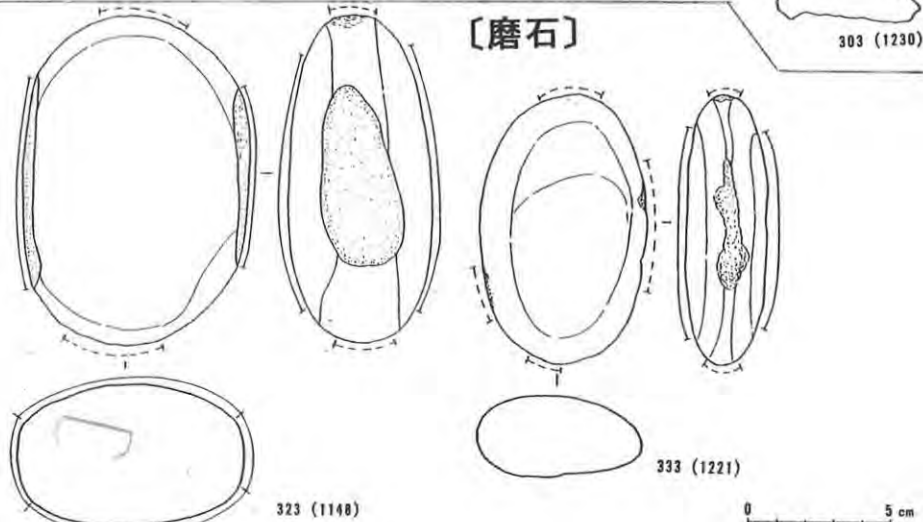
〔石錘〕 ※以外SB02出土



〔磨製石斧〕



〔磨石〕



網点部分にタール付着

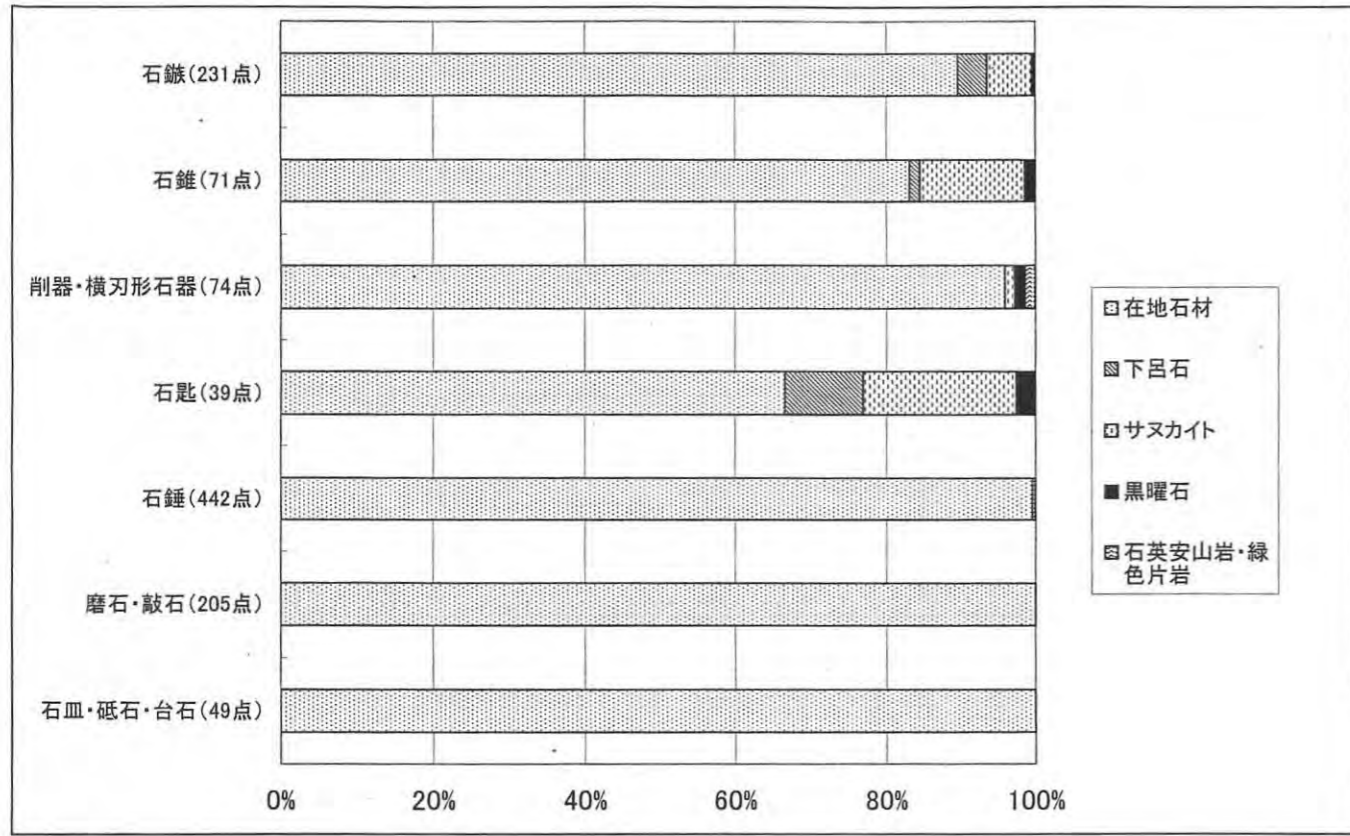


表4 石器の石材組成

SB01 (932点)	2群	6群	6'群	9群	3・10・11群	12群	13群					
SB10 (320点)	2群	6群	6'群	9群	3群	10群	7群	12群	13群			
SB08 b (382点)	2群	6群	6'群	9群	3群	10群	11群	7群	12群	13群		
SB09下層 (300点)	2群	6群	6'群	9群	3群	10群	11群	4群	7群	12群	13群	
SB09上層 (363点)	2群	6群	6'群	9群	3群	10群	11群	4群	5群	7群	12群	13群
SB02 (442点)	2群	6群	6'群	9群	3・10・11群	4群	5群	8群	7・12群	13群		

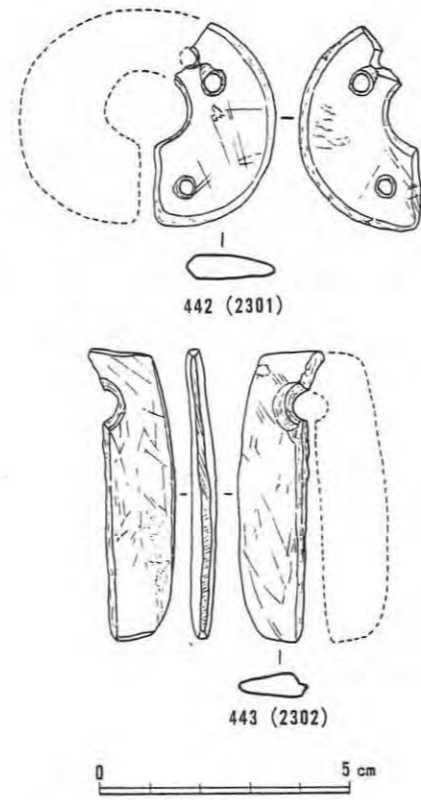


図12 貝状耳飾

(442…SK08出土、443…発掘排土)

表5 縄文前期竪穴式住居出土前期土器類別比率グラフ

(SB03・SB04 b・SB05は出土点数が少ない為、グラフ化しなかった)

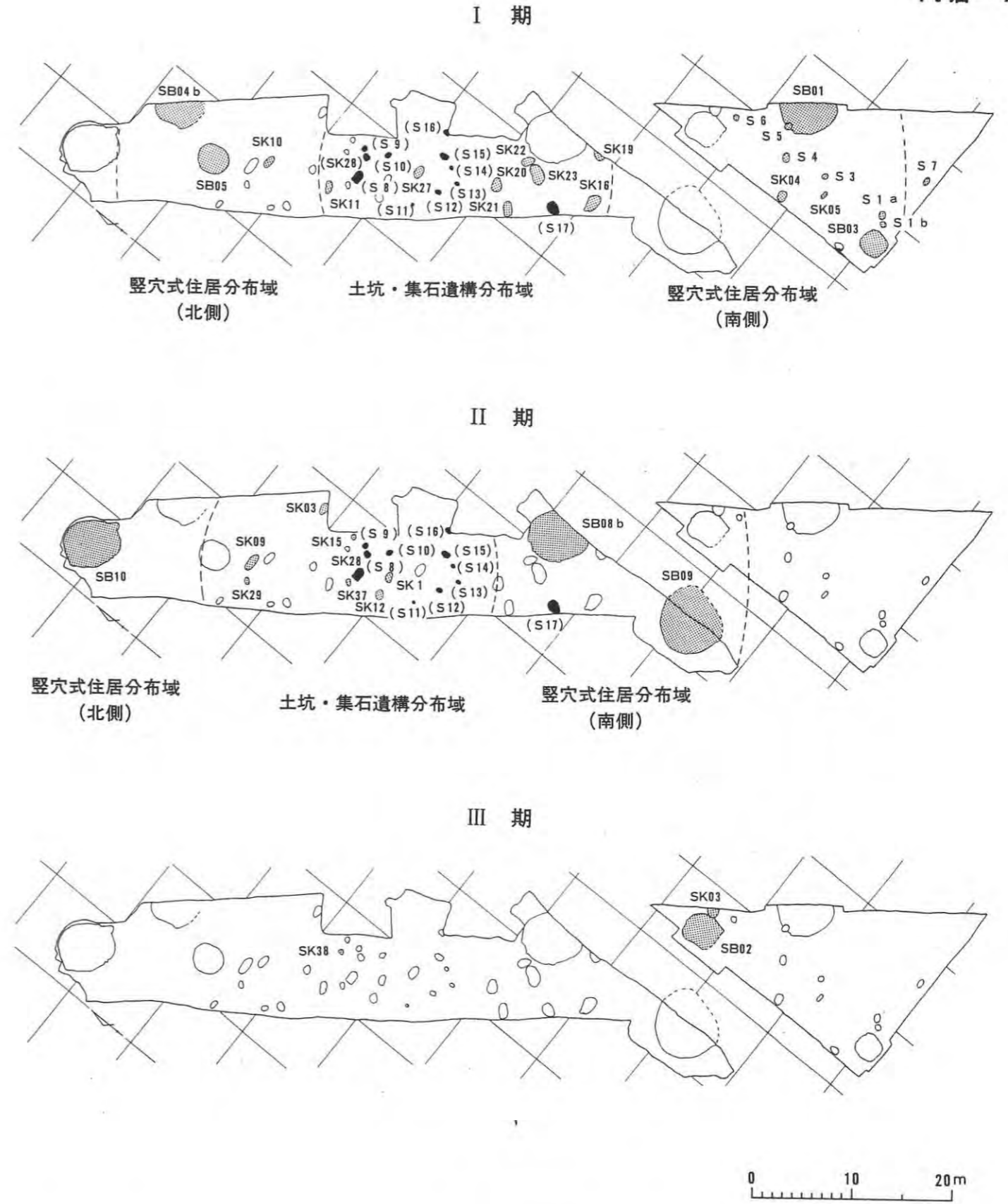
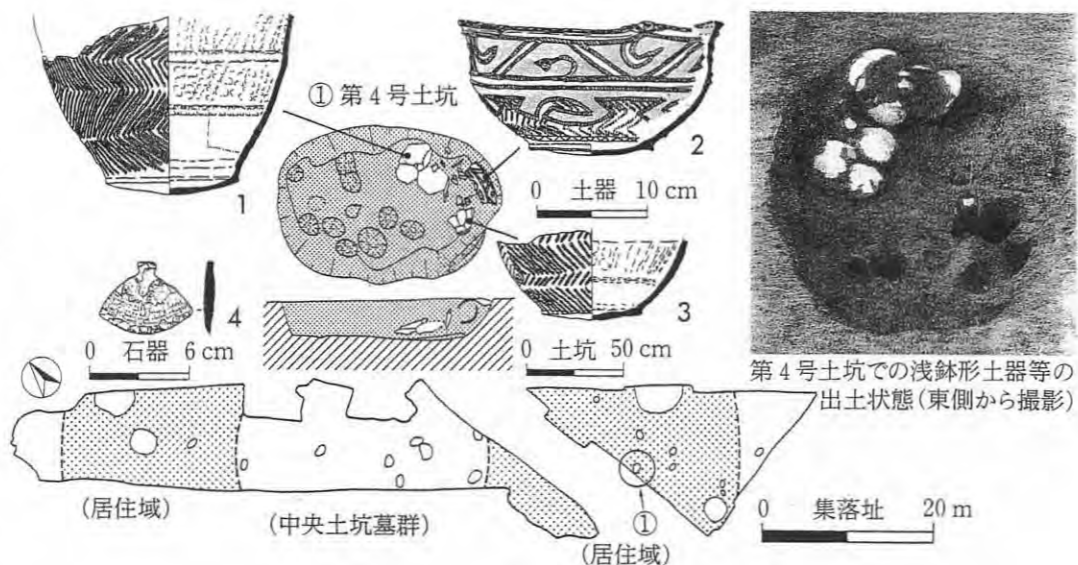
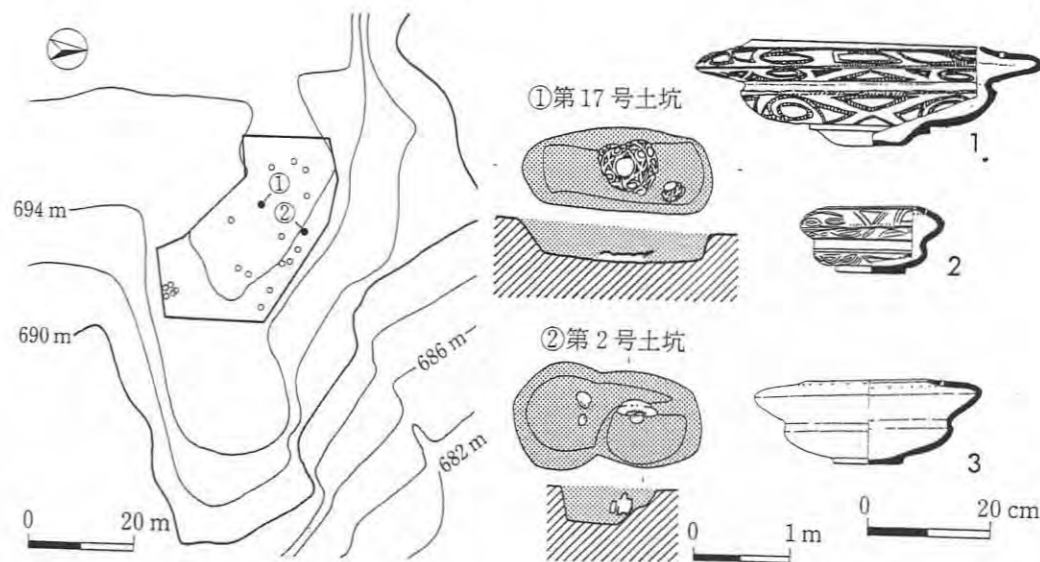


図13 A区縄文前期集落変遷模式図 (I～III期)

(黒塗りの集石遺構は時期不明)

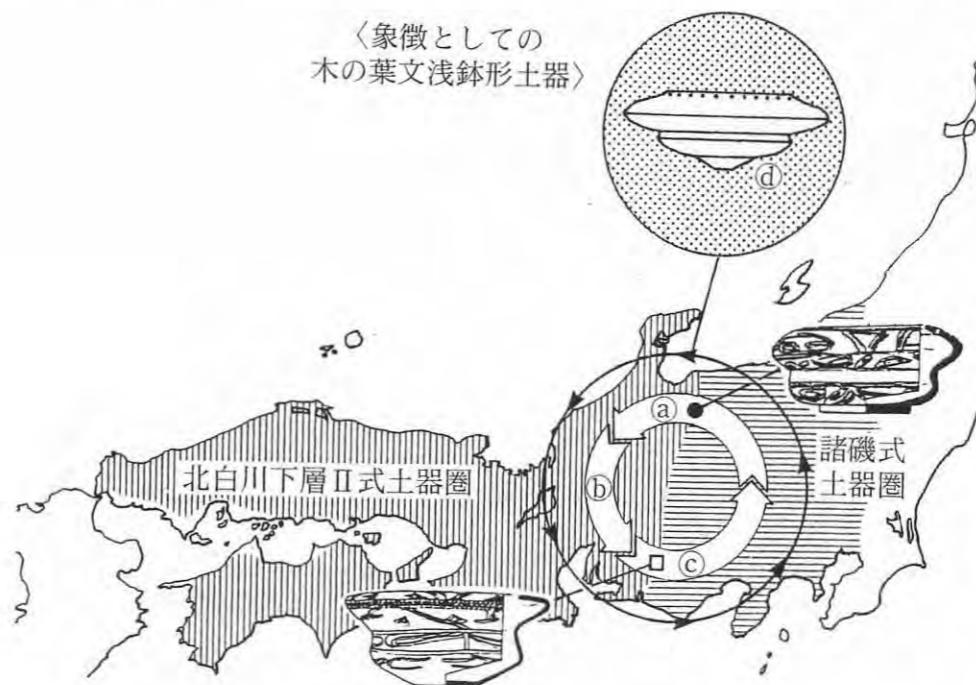
45 副葬された木の葉文浅鉢形土器(一) 1の土器は底部を上に向けた倒立した状態①で出土した。(長野県丸山遺跡)



第4号土坑での浅鉢形土器等の出土状態(東側から撮影)

55 副葬された木の葉文浅鉢形模倣土器 北白川下層Ⅱ式土器圈内における木の葉文浅鉢形土器の模倣製作には、忠実な模倣からかなり変形された模倣まで、いくつかの段階があった。2は同圏東端の東海西部地域の特徴をよく表わした模倣浅鉢である。(岐阜県御望遺跡)

〈象徴としての木の葉文浅鉢形土器〉



62 循環する象徴 木の葉文浅鉢形土器(●印)とその模倣土器(□印)との交換は、対向する二方向の流れではなくて、模倣製作(●)を介して閉じた円環となる。そこを(象徴としての木の葉文浅鉢形土器) (□)が循環し続ける。

循環の象徴

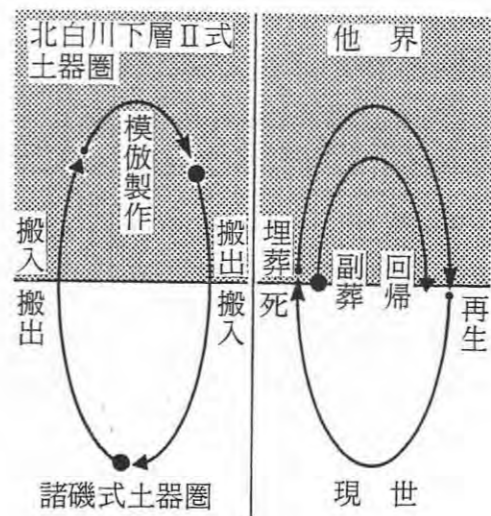
再生観念が存在したことの証拠として、副葬品があることを指摘する見解もあった。そのような従来の見解では必ずしも十分な解説がなされているわけでもないが、死者に手向けられた副葬品は死者があこの世で使用するためのもの、と解釈していることが読みとれる。この場合は、先に整理した遷移的再生ということになる。この程度の説明ではたして再生観念の存在を論証できたのか、そのことも気がかりだが、それよりもむしろ本書で取り扱ってきた威信財のカテゴリーに属する象徴的器物である木の葉文浅鉢形土器などをあこの世に持ち込んだところで、何の用が足せるのであろうかと心配になる。

儀礼交換に用いられた、というよりも、それを演出した木の葉文浅鉢形土器、またその複製である木の葉文浅鉢形模倣土器。この両者は本当のところはいかなる理由で葬送儀礼に取り込まれ、死者と一緒に埋められたのであろうか。

さてここで、先に復元した木の葉文浅鉢形土器の儀礼交換がいかなるものであったのかを再確認しておく。諸磯式土器圏で製作された木の葉文浅鉢形土器(●印)が、まず北白川下層Ⅱ式土器圏側へと贈答(搬出)される(図62a)。北白川下層Ⅱ式土器圏に搬入された木の葉文浅鉢形土器は、そこで模倣製作のモデルとなる。そして新たに模倣製作された木の葉文浅鉢形模倣土器(図62の□印)は、諸磯式土器圏側へと贈答(搬出)される(図62c)。一見すると、木の葉文浅鉢形土器と木の葉文浅鉢形模倣土器との対向する二方向の流れのようだが、両者は模倣製作によって結びつけられ(図62b)、そこに円環の流れが生じることになる。実物の交換対象である木の葉文浅鉢形土器とその模倣土器は、贈答された先々で儀礼的に処理されてしまうが、象徴としての木の葉文浅鉢形土器は諸磯式土器圏と北白川下層Ⅱ式土器圏とを貫くその円環に沿って循環し続けているのである(図62d)。

このような性格の木の葉文浅鉢形土器が、葬送儀礼を演出し、死者と共に土坑墓に埋められるのである。その埋め方は、時として容器であることを否定するように、伏せられた状態で遺体の傍らに、あるいはその上に置かれるものであった。あの世での日常什器としての役割が課せられたのではあるまい。では、なにゆえ。それは、循環の象徴としての木の葉文浅鉢形土器を副葬することによって、死者に循環という象徴性を帯びさせて、この世への再生を願ったのではないかと推論される。この場合の再生とはまさに回帰的・循環的再生ということになる(図63)。

63 再生観念の論証 (循環の象徴としての木の葉文浅鉢形土器。木の葉文浅鉢形土器の副葬は、再生を願う死者に循環という象徴性を帯びさせるために執り行われたのであろう。)



御望遺跡土坑SK04を紹介した研究

(小杉康著『縄文のマツリと暮らし [先史日本を復元する3]』2003年、岩波書店)